

# 日本天文学会早川幸男基金渡航報告書

2003年9月10日採択

申請者氏名	大栗真宗 (会員番号 3997)
連絡先住所	〒 113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
所属機関	東京大学理学系研究科物理学専攻
職あるいは学年 (年齢)	D2
電子メール	oguri@utap.phys.s.u-tokyo.ac.jp
渡航目的	研究集会での口頭発表
講演・観測・研究題目	First Large Separation Lensed Quasar from the SDSS
渡航先 (期間)	アメリカ (2003年9月30日～10月5日)

2003年10月1日から10月4日にかけてフェルミ国立加速器研究所でおこなわれた SDSS collaboration meeting に参加し、「First Large Separation Lensed Quasar from the SDSS」というタイトルで口頭発表をしてきました。

まず、到着したのが9月30日の朝で時間があつたので、共同研究者でもある Chuck Keeton 氏を訪ねてシカゴ大に行くことにしました。途中電車の駅がわからず町中をぐるぐる回るといふハプニングもありましたが、なんとか昼前にたどり着きました。彼と直接会うのは今回が初めてでしたが、とてもいい人でつかの間の滞在を楽しむことができました。さらにその他のシカゴ大の人々とも挨拶をすることができて有意義な訪問になったと思います。

私の参加した会議は普通の研究集会とは少し異なり、SDSS の SDSS による SDSS のための会議といった感じで、science の発表に加えてデータ公開の web に関する話や SDSS の今後の予定といったことも発表され議論されます。特に現在では資金難からサーベイ終了時にサーベイ領域にギャップができるという問題があり、今回それが science にどのような影響を与えうるかといったことを特に大規模構造の研究の見地から盛んに議論していたのが印象的でした。また、会議では plenary session の他に各 working group の session もあり、そこではより突っ込んだ議論がなされています。

今回私が話したのは、SDSS を使って発見した初の大分離角重力レンズクエーサーについてです。これまでの重力レンズクエーサーの最大の分離角は6秒程度ですが、今回発見したのは分離角が14秒程度あり、もちろん記録を大幅に更新したことになります。幸いにも plenary session で話ができることになりました。緊張しつつ自分の出番を待っていると、なんと発表の直前にこのレンズの発見論文の投稿先の Editor から”we can in principle offer to publish it” という吉報が届くという事件(?) が起こり、共著者である Daniel Eisenstein らと固い握手を交わしました。そんなこんなであわただしく自分の番をむかえましたが、なんとか無難に発表を終えることができました。発表した内容がよかったのか、はたまた共同研究者の稲田直久氏といれかわりたちかわりに発表するという斬新なスタイルがうけたのかはわかりませんが、発表後に多くの人からお褒めの言葉を頂き、大きな自信になりました。また、予定には無かったのですが急拠重力レンズクエーサーの

working group が開かれることになりました。昼食時を利用して行われたのでほんの短い時間でしたが、今後の追観測の方針について議論ができとても有意義でした。総じて私の研究を強くアピールすることができ、非常に充実した会議であったと思います。ただ、一つ残念だったのは思ったよりも忙しくて加速器を一周するという当初の目標が達成されなかったことです。

最後になりましたが、渡航を援助して頂いた早川基金とその関係者の方々に厚くお礼申し上げます。